

「コブサイドテンジユ」——世界を救う禍

テンジユ科

危険度：☆☆☆☆

生息数：☆☆☆☆

生態

コブサイドテンジユはテンジユ科の中では中間的な報告数の禍である。非常に巨大な幹の部分だけが確認されるのみで、その全体像は未だ確認されていない。道を塞ぐような形で現れる場合が多いが、目的地への進行を妨害する目的はないようである。

この禍は人間から「神性」を取り除いていると考えられている。人間が人間であるという事実は、「野生動物」ではないという点と「神」ではないという点の二つによって定義された事実なのである。

解説

「世界を救う」という言葉を聞いて何を思い浮かべるだろうか。それはヒーローか神の所業だと思いきや、浮かべた人間が大半であると思う。まずヒーローは「世界を救うヒト」な

ので当然思い浮かぶものであると言えるが、神の方はどうだろうか。神が「世界を救う」というのはもちろん事実ではなく「イメージの問題であるが、よく考えると「神」のイメージにも二パターンがあるというこ

とが分かってくる。まずは前述のように人類を救う「ヒーロー」の延長としての「神」。もう一つはヒーローとは別物の「人類を救わない神」である。「人類を救わない神」とはすなわち世界を「創つただけ」の神であり、神道や自然宗教などの考え方に近い。その二つの「神」は全くイメージの起源の異なるものであり、別物である。ヒーローとは人類が「成れる」ものであり、「世界を創つただけの神」とは人類が「成れない」ものであるという大きな差がある。もちろん人間は世界を創れないが、それを言ってしまうと大半の人間はヒーローにもなれない。ここで言う「成れる」とは、「想像できる」ということに置き換えられるもので、「世界を創つただけの神」という存在は人間には（主観的には）想像もできない存在なのである。

人間は「神」に近づきたいという試みを続けてきた。それは完璧でないが故に完璧を目指すという自己補完の意識であり、それは全ての向上心、希望、変化そのものの根幹をなす意識である。人間がもし「神」になれた時、そこには向上心などあるわけもなく、希望は不要で、変化さえも消失するとい

うことになる。それが「完璧」なのである。よってその時目指しているものが人類を救うヒーローであるならば、その目的は完璧ではないということに気づく。たとえ「世界を救ってヒーローになった」としても、それはただの凄いやヒトなのである。完璧を目指すという最初の目的を見失わない人間はそこに気づき、ヒーローではない神を目指そうとするが、それは人間には想像もつかない存在であるので目指すことはできないという矛盾に陥ることになるのである。

逆説的に考えると「人類を救う」という考え方は完璧ではないということになる。確かに人類を救うなどという目的は矛盾だらけである。人類を救いたいという意識の根底を覗いてみれば、そこには「自分という個の帰属する集団（自分の一部でもある）をより良いものにしただけ」という人間らしい感覚があるのである。

対処法

前述のように人間は完璧にはなれず、完璧を目指すことすらできない。その不完全さが人間であり、このコブサイドテンジユもたらず存在なのである。この禍が存在しなければ人間はどのような存在になっていたのか、興味は尽きない。

